特別支援教育の扉 №８３　　令和６年１月１２日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

交流の始まりの話

今から３０年以上前の古い話を紹介します。平成３年・４年、向能代小学校が当時の文部省より、「心身障害児理解推進研究校」の指定を受け、比内養護学校ねむの木分教室（のちの能代支援学校）と学校間交流を始めました。平成４年１０月、公開研究会を開催し、２年間にわたる交流活動の成果を県内外の関係者に発表しています。

１　主な交流活動の内容

行事や授業を通した交流（制作活動・サツマイモ掘り）、保護者の懇親会、職員スポーツ交流等。

２　印象に残っていること　※私は平成４年・５年にねむの木分教室に在職していました！

（１）子どもの変容

ねむの木分教室の子どもたちは、大勢の向能代小学校の友達を前にして、戸惑いと緊張で手をつなぐことさえできなかったが、向能代小学校の子どもたちが、事前学習でねむの木分教室の子どもたちの実態や特性を学んでいたので、交流を重ねるうちに、自然と関わりができていった。直接交流することの大切さを知った。

（２）保護者の変容

①向能代小学校の保護者（授業参観と懇親会に参加して）

今日、子どもたちの授業を見ているときどう接してよいか分からず、「ああ、うちの子は元気でよかった」と思いながら遠巻きに見ていました。まだ、子どもがお腹にいるときにスーパーで障害のある子どもを見たとき、冗談ながらも「もしあんな子が生まれたら一緒に死んでしまった方がましだ」と思ったこともあります。だから、ねむの木のお母さんたちの話を聞いて私はとても恥ずかしく、ただただ涙があふれてきました。我が家の小２と小５の子どもたちはこの交流のおかげで、私のような偏見をもった大人にならないだろうと思います。そして、私も今までとは違った目で障害のある子どもたちと接していけるのではないかと思います。

②ねむの木分教室の保護者（公開研究会に参加して）

公開研究会の会場で、二人の若い先生が「障害児が能代にこんなにいると思っていなかった」「10人くらいだと思っていた」と話しているのを耳にしました。私は心の中で「いいえ、30人いますよ。そのことを知ってくださってありがとう」と言いました。「障害児は汚いと思っていた」の言葉も、今まで表面に出ることはなかった言葉だと思います。交流をしたからこそ「汚いと思っていたけど」といってくださったのだと、うれしく思います。

③向能代小学校の先生方（２年間の研究を終えて）

「交流を通して、芽生えてきた相手の立場になって考える、思いやりの心、共に生きる心を、これからの日常生活に生かしていきたい」、「頭で理解するのも大切だが、直接触れ合うことの大切さを教えられた」などの感想が寄せられた。

交流を通して一番変わったのは、大人ではないかと思います。今も両校の交流は脈々と続いています。違いは時として、いじめや偏見を生みます。しかし、違いが当たり前である以上、それを認め、尊重することでしか未来は築けません。違いを丸ごと受け入れる学級づくりを目指すために、相互のねらいが達成される交流及び共同学習の実施を願っています。

とれたて直送便

先月、大手百貨店から届いたぐっちゃり崩れたクリスマスケーキを３歳の息子が自由に飾り付けた写真がX（ツイッター）で紹介されて反響を呼びました。子どもは「キラキラのイチゴだ！」と喜び、お母さんは「味はよく分からないけど、これはこれで一生の思い出になりました」と、明るく語っていました。ピンチを前向きに捉え、「楽しんじゃえ！」と見方を変える大切さを痛感しました。「大変」は、大きく変える、変わるチャンスです。